

# 報 告

# 鹿児島大学 楽知ん研究会 の活動

－ 科学教育の指導者養成を目的とする学生ボランティア組織の運営 －

愛知県立芸術大学 松野 修

## 1 . 鹿児島大学楽知ん研究会の再編

鹿児島大学生涯学習教育研究センターが主宰した自主ゼミナール「鹿児島大学楽知ん研究会」の活動については、松野修「大道仮説実験ワークショップ in 鹿児島」『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報 第5号』（2008年刊）でその一端を報告した。2007年12月には30人近くの学生ボランティアの協力のもと、280人余の一般参加者を得て、鹿児島大学稲盛会館で開催した「大道仮説実験ワークショップ全国大会 in 鹿児島」を成功させたこともそこに書いた。

その後、鹿児島大学楽知ん研究会は2008年3月をもって解散し、翌年度からは新たに活動を再開した。とはいえその実情は2007年度を中心メンバー5、6人が残り、新メンバーの登場もほとんどないまま、従来どおりの活動を継続したにすぎない。2007年に「学生による市民のための科学教育運動の実現」という鹿児島大学楽知ん研究会を立ち上げたときの目標を達成してしまったため、監督としてのわたしが次の目標を設定しあぐねていたのである。そうこうするうちに大きな成果もあげないまま、2008年度鹿児島大学楽知ん研究会も2009年3月に解散した。2007年鹿大で開催した大道仮説実験ワークショップ全国大会が、学生ボランティアにもたらした教育効果はたしかに大きかった。けれどもこの大会の運営に携わらなかった学生やその開催さえ知らない新入生にすれば、過去の成果は伝説と神話でしかない。過去の成果や前例を持ち出して先輩たちが忠告すれば、新しいメンバーは自分たち自身の力で新しい時代を切り拓くという実感を持ってないまま終わってしまう。メンバーの大幅な入れ替えを意図して1年の間隔をおき、2009年に再々度、楽知ん研究会を結成したのはそのためだった。2007年に中心メンバーだった学生は2009年3月に卒業し、大学院に残ったメンバーも楽知ん研究会の解散宣言を聞いた時点で、新しい世代に潔く活躍の場を譲ってくれた。

## 2 . 2009年度の活動計画

2009年4月、鹿児島大学楽知ん研究会を再結成したときの中心メンバーはわずかに4人。そのうち2007年ワークショップに携わったメンバーは進藤隆彦君（かごしまルネサンスアカデミー研究支援者）、坂口直樹君（大学院教育学研究科）、鮫島麻美さん（理学部）の3人で、2007年のワークショップを知らないメンバーは田中華子さん（工学部）1人だけだった。この時まで5年間ずっと、わたしは鹿大楽知ん研究会の組織や運営について学生のメンバーと議論することを避けてきた。同じような経験値をもつ先輩がひとつの組織に複数いれば、誰が主導権を執るかについて危うい競争が起こりかねず、そのことが本来の活動の目的とは別の次元でメンバーに強い葛藤を引き起こすことがある。そこで自主ゼミの組織運営に関しては学生同士で議論させず、敢えてわたしが専横的に判断を下してきた。しかしこの年度からは、中心メンバーとだけは組織運営について意識的に意見を交換することにした。彼らは市民向けの科学教育を実施するにあたって、これから迎える新人たちとは歴然とした経験値の差があった。そこでこの3人には各々別個の活動領域について責任者になってもらうことにした。こうして、自主ゼミの組織運営について特定のメンバーと意見を交換できる条件が整ったために、これまでにない新しい活動の目標として、〈科学教育の指導者養成〉を掲げることが可能になった。

## 3 . スタッフの新規募集

2008年度末、4月からのメンバーが4人しか確定していない時点で立てた活動計画は、これまでのどの年度よりも過密だった。その企画を実施するにあたっては連携相手を探すことから始まって、会場の確保、宣伝、講座そのものの準備、事前の参加費の徴収、当日の受付、会場の設営、会計、スタッフの食事の手配、事後の報告までを誰かが担わなくてはならない。さらにその上、学生を新規に募集し、その学生をスタッフとしての養成することが必要になる。だからこの企画を実現するにはスタッフの新規募集が

不可欠の条件だった。「予め定めた企画を実現するために、スタッフを募集する」？ いやそうではない。中心メンバーと話しながら発見した組織戦略はこれとは逆の論理だった。すなわち少数の信頼できる志の高い学生スタッフを新しく募るには、自分たちだけでは手にあまるほどの、しかし学生から見て参加するに値する企画が必要だ。少数では担いきれないが、しかし実現するに値する企画の実現が危機に迫っているとき、そのとき初めてそれを補うスタッフが登場する。それがこの時点での見通しだった。それでもなお信頼できる新しいメンバーが登場しないのなら、そのときは自分たちだけで責任をもってやり遂げるほかないと誓いあったはずだ。

2008年度まで、鹿児島大学楽知ん研究会の活動に参加する学生を新規に募集するために、わたしが担当する講義の中で活動を紹介してきた。けれども2009年度には、担当する講義の位置づけを変え、鹿児島大学楽知ん研究会の活動に資するために講義を展開することにした。教職科目「教育学1」では、講義で大道仮説実験を紹介するだけでなく、鹿児島大学楽知ん研究会のメンバーである学生自身に講師役をつとめさせ、講義を履修する学生たちよりも、まずは講師役をつとめる学生自身の成長を期した。共通教育科目については、前期、後期とも各1コマを増やし、前期開講の「仮説実験授業1」では、本格的な仮説実験授業の授業書を取りあげ、演習実験のために鹿児島大学楽知ん研究会のメンバーに毎回、助手として参加してもらった。つまり学生スタッフの授業技術の向上をめざしてこの講義を開講したともいえる。後期開講の「科学教育入門」では、分子模型づくりを講義の中心に据え、毎回の講義は坂口君はじめ鹿児島大学楽知ん研究会のメンバーにアシストしてもらった。毎週の講義で分子模型づくりのたのしさを体験



1. 11月18日科学教育入門で 分子模型づくりの準備

すれば、この受講生の中から「親子で分子模型をつくろう」の講座スタッフを買って出る学生も出てくるだろう。

「受講する学生ではなく、講義をアシストする学生自身にとっての教育的効果を第一義的に配慮した」などと明言すれば、本末顛倒との譏りをうけるかもしれない。だが、そうした戦略に則った講義が履修した学生にとって適切であったかどうかの判断は学生からの評価を俟つべきだろう。そしてこの年度の学生からの評価は、わたしがこの大学に赴任して以来どの年度よりも高かった。それに2003年から2007年まで4年間継続的に活動を続けても、鹿児島大学楽知ん研究会の学生ボランティアは最大限30人を超えることはなかった。しかし、たった4人ではじめて2009年には、わずか1年の活動で、メンバーは延べ30人以上になった。まずは鹿児島大学楽知ん研究会の活動に資するためにこそ講義を展開するという姿勢に徹したからこそ、受講している学生の側からも、これまでになく高い支持を得ることができたのだった。

従来から毎週金曜午後6時から生涯学習教育研究センター演習室で、自主ゼミ「鹿児島大学楽知ん研究会」を開催していた。2009年度には、このゼミに毎週のように新人が登場した。



2. 6月12日 生涯学習教育研究センター演習室で 楽知ん研究会 例会

#### 4. 「大道仮説実験講座」

新しく参加した学生を含めて実施した事業は以下のとおり。科学館との連携については2005年12月以来継続しており、2007年度からは講座の運営に関してもすべて進藤君が担ってきた。この講座については進藤隆彦「鹿児島市立科学館との連携事業 公開講座 大道仮説実験」『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報 第5号』(2008年





3. 10月11日鹿児島市立科学館で「大道仮説実験講座」

刊)に報告がある。2009年度には延べ8日間、合計24ステージを実演した。この科学館での毎月の講座は、新人がデビューする場となった。

鹿児島市立科学館以外にも、長崎市立科学館や同県県内の小学校でも実施した。長崎県内での講座についても渉外をはじめ、すべてが進藤君の企画による。

なお、鹿児島市立科学館のスタッフの方がた、とりわけ新納時英館長、中村哲次長、永田一主任には「大道仮説実験講座」だけでなく「夏休み親子孫科学講座」や「科学の祭典」でも、ひとかたならぬお世話になった。学生たちの発表の場を提供していただいたのは、たいへんありがたかった。

## 5. 「親子で作ろう 分子模型講座」

これは発泡スチロール球を使った分子模型を親子で作って楽しむ講座である。1回90分で、前期4回、後期3回のシリーズ。教室と設備の制約があるので、親子12組、30人程度を定員とした。参加する親子に分子模型を作らせるには、少なくとも1グループ(2組6人)に1人の学生アシスタントを確保しないと講座が成立しない。毎回12組の参加があれば、最低でも6人の学生に事前に作り方を習得させ、当日の講座のために発泡スチロール球に色を塗らせるなどの準備が必要になる。当初、学生アシスタントの参加が心もとなかったので、かごしまルネッサンスアカデミーの修了生・田中葉子さんらにも手伝ってもらうことにした。

前期にはかごしま環境未来館との連携事業が実現せず、会場を借用するだけの関係に終わったこともあって参加者は3組だけだった。けれども「仮説実験授業1」や「教育



4. 2010年2月11日 熊本県山鹿市で「親子でつくろう 分子模型講座」

学1」の講義を履修する学生の中から本幡絵里子さん(水産学部)、今村桜子さん(理学部)、元翔子さん(教育学部)らがアシスタントとして新たに加わって、充実した講座になった。前期①4月11日〈空気の分子〉、②5月9日〈オキソ酸の分子〉、③6月13日〈ガソリンの分子〉、④7月11日〈アルコールの分子〉。前期のわずかに3組の参加者である徳永さん、吉永さん、立石さんはその後、鹿児島大学で開催した科学講座にも意欲的に参加していただき、いわば浅からぬご縁となった。後期には会場を鹿大生涯学習教育研究センター演習室に移した。夏休み中に開催した科学講座参加者を対象に後期から開始する分子模型講座の参加を募ったところ、20組以上の申し込みがあった。後期には学生のスタッフも大幅に増えたが、設備の制約があるので、14組だけを受け入れた。⑤12月19日にはスタッフ14人で〈ブドウ糖の分子〉、⑥1月23日にはスタッフ12人で〈アミノ酸の分子〉、⑦2月20日にはスタッフ15人で〈ニトログリセリンの分子〉を製作した。後期になっても親子1組にスタッフ1人がつきっきりで指導するという贅沢な態勢を維持できた。多くの学生アシスタントは半年足らずしか練習できなかったのに、ブドウ糖やニトログリセリンのような分子量の大きい分子を参加者に作らせられるまで成長した。

## 6. 「親子でたのしいものづくり講座」

これまで鹿児島大学楽知ん研究会は科学教育をテーマとした公開講座しか企画してこなかったが、2009年度には講座のマネジメントができる学生を養成するべく、ものづくりをテーマに選び、この講座の運営を鮫島麻美さんに任



5. 4月3日 サンエールかごしまで  
「親子でたのしいものづくり講座」

せた。ものづくりがテーマならアシスタントの学生も、分子模型製作よりもっと気軽に参加者とコミュニケーションできる。この講座が実現するにあたっては、生涯学習教育研究センターの事務補佐員としていっしょに働いている久保希さんの存在が大きかった。久保さんはこの仕事に就く前に、サンエールかごしまを会場に、若い母親を対象とした講座を自ら企画運営した経験があるという。おかげで鮫島さんを補助してもらうことができた。

講座の実績は以下のとおり。前期①4月3日〈折り染めのお試し〉、②5月15日〈折り染め第1回〉、③6月26日〈折り染め第2回〉、④7月30日〈大きな用紙を使って折り染め〉、⑤8月21日〈折り染めを使ってパウチ作品づくり〉、後期⑥11月23日〈和風ペン立て第1回〉、⑦12月20日〈和風ペン立て第2回完成〉。毎回の参加者は5人から6人。金曜午後からの開催だったがそれでも金城七海さん（工学部）、小島亜衣さん（法文学部）ら、毎回2、3人の学生のアシスタントが参加した。理学部4年生だった鮫島さんは後期から就職活動や卒業研究と重なって講座の準備がたいへんだったが、それでも当初の予定どおりやり遂げた。なお、かねてからの念願だった託児付きの講座が実現したのは久保さんの采配による。

## 7. 「夏休み 親子孫でたのしい科学講座」

この講座の概要については、松野修「2005年夏休み 親子科学教室」『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報 第3号』（2006年刊）で報告した。2004年度から2008年度までの実績は以下のとおり。2004年度①8月25日（水）

～8月28日（土）の4日間、午前10時～11時30まで、鹿児島大学教育学部で《もしも原子が見えたなら》。②2005年1月7日（金）～1月8日（土）の2日間、午前10時～11時30まで、生涯学習教育研究センター演習室で、《ふしぎな石じしゃく》。2005年度①8月3日（水）～8月6日（土）の4日間、午前10時～11時30まで、鹿児島県民交流センターで、《もしも原子が見えたなら》。②8月24日（水）～27日（土）の4日間、午前10時～11時30まで、鹿児島大学教育学部で、《粒子と結晶》。2006年度①8月16日（水）～8月19日（土）の4日間、午前10時～11時30まで、鹿児島市立科学館で、《もしも原子が見えたなら》。②8月24日（木）～8月27日（日）の4日間、午前10時～11時30まで、鹿児島市立科学館で、《自由電子が見えたなら》。2007年度①8月16日（木）～8月19日（日）の4日間、午前10時～11時30まで、鹿児島市立科学館で、《もしも原子が見えたなら》。②8月23日（木）～8月26日（日）の4日間、午前10時～11時30まで、鹿児島市立科学館で、《30倍の世界》。2008年度①年8月6日（水）～8月9日（土）の4日間、午前10時～11時30まで、鹿児島市立科学館で、《もしも原子が見えたなら》。②8月20日（水）～23日（土）鹿児島市立科学館で、《磁石のふしぎ》。



6. 8月8日 鹿児島大学郡元キャンパスで  
「夏休み 親子孫でたのしい科学講座」

この講座への参加申込は2005年8月24日からの講座へ25組の参加があったのを最高に、2008年8月には10組以下に減少していた。そこで2009年度には例年よりも早く開催することにした。6月下旬に講座案内を印刷し、7月上旬には国分市内の小学校にビラ1万枚、鹿児島市内の小学校に2万枚を配布した。その効果があって、それぞれの



講座に定員の2倍近くの申し込みがあり、念願どおり〈行列のできる科学講座〉になった。2009年①7月25日(土)から7月26日(日)の2日間、午前10時から午後3時まで、《もしも原子が見えたなら》、霧島市シビックセンターには20組50人が参加。今回初めてだった霧島市での開催については仮説実験授業研究会会員・松田心一氏が国分市教育委員会との交渉にあたってくださった。②7月29日(水)午前10時から午後4時まで、《もしも原子が見えたなら》。鹿児島市立科学館には20組50人が参加。学生が学期末試験だったこの時期には、田中葉子さんのほか鳥羽啓子さんらもアシスタントを勤めてくれた。③8月8日(土)から8月9日(日)の2日間、午前10時から午後3時まで、《電磁波の世界》。鹿児島大学郡元キャンパスには、これまで最高の40組100人が参加した。7月下旬は夏休みが始まったばかりで講座に参加しやすい時期だろうが、学期末試験と重なって学生がアシスタントとして参加するには最悪の時期でもある。にもかかわらず富田南さん(教育学部)、宮田直彦君(理学部)、池田真子さん(水産学部)など、毎回数人の学生が新たにスタッフとして加わってくれた。

## 8. 「たのしい科学教室」

この企画は2008年3月7日玉江小学校での開催を嚆矢とする(この企画も松田心一氏の仲介による)。その後、この企画を夏休み科学講座の宣伝として位置づけ、2008年6月28日に改めて玉江小学校で、2008年7月8日には伊敷台小学校で開催した。2009年には7月9日に伊敷小学校で、7月13日には中山小学校で実施した。伊敷小学校での開催はかごしまルネサンスアカデミーのスタッフ青山朋代さんが、中山小学校については分子模型講座の参加者である徳永美保さんが各校の校長と話をまとめてくれた。た



7. 7月9日 伊敷小学校で「たのしい科学教室」

だし夏の講座の前宣伝という意味では、7月上旬にすでに参加申込が定員を超えていたので遅きに失した。この企画には北村晃太郎君(水産学部)、楠翼君(水産学部)らが初めて参加した。

## 9. 離島での「たのしい科学教室」

この講座は2006年から毎年9月に実施している。鹿児島県内の離島に居住する市民は、市立科学館で行っている大道仮説実験講座や夏休みの科学講座には事実上参加できないので、こちらから島に出向いて講座を行ってきた。それに離島での科学講座は準備の段階を含めて、参加する学生にとっても大きな飛躍の機会となる。2006年9月12日には与論島茶花小学校で実施した。学生13人が参加。合宿は9月11日から14日まで。6月末に与論町教育委員会にこの企画について手紙で説明し、科学教室を実施させてくれる小学校を募集してもらったところ、茶花小学校から引き受けるとの返事があったので実現した。このときの科学教室については加治屋麻衣著、松野修編「与論22時間 南の島 与論島で楽知ん科学教室」『たのしい授業』No.317(2006年刊)に報告がある。2007年は9月20日に奄美大島古仁屋小学校で実施。松田心一氏の仲介による。学生12人が参加。合宿は9月17日から23日まで。2008年は9月9日に薩摩硫黄島三島小中学校で実施。同校に勤務していた仮説実験授業研究会会員・立岡弘明氏の仲介によって実現。学生5人が参加。仮説実験授業研究会会員・下町治氏も同行。合宿は9月9日から10日まで。

2009年は9月26日から10月1日まで5泊6日。これまでで最長の合宿となった。この合宿には2009年から新たに自主ゼミに加わった広瀬公子さん(水産学部)を含む6人の学生が参加した。9月27日には鹿児島県立奄美図書館で、親子100人を前に学生が大道仮説実験〈しゅぼしゅぼ〉を上演後、松野がゲーリケのポンプ実験を再現。その後徳之島に移動し、29日に徳之島山小学校で〈ころりん〉と〈もくもく〉、山中学校で〈しゅぼしゅぼ〉と〈どっか〜ん〉を実演。30日、再び徳之島山小学校を訪問し〈バンジーチャイム〉を披露した。徳之島山小学校、山中学校での講座の実現は同小学校に勤務する仮説実験授業研究会会員・川口啓史氏の仲介による。この合宿中に20歳の誕生日を迎えた田中華子さんの活躍は、これからも語り継がれることだろう。

鹿児島県立奄美図書館での科学講座は同図書館との連携事業として実現した。この企画は同図書館に勤務する早崎



8. 9月29日 徳之島 山小学校で  
「たのしい科学教室」

晋一氏の尽力による。参加費は無料ながら、事前に申し込みをしてもらうことにし、定員を40組100人と設定した。同図書館から地元新聞社とFMラジオ局を通じて情宣してもらった結果、募集開始とほぼ同時に定員に達した。同図書館は奄美群島全域をカバーする図書館ネットワークのコアにあたる。講座実施後、次年度からは本図書館で講座を開くだけでなく、他の離島にある図書館でも講座を実現できるように検討するとの申し出があった。離島での科学講座でも、子どもだけでなくおとなにも参加してもらいたいと思っていたので、これは魅力的な提案だった。なお、離島の科学講座に参加する学生に対して、2008年度までは何の予算措置もできていなかったもので謝金は一切なく、食費、宿泊費は言うまでもなく交通費もすべて学生が負担していた。2009年に初めて、離島までの学生の船賃と現地でのレンタカー代を生涯学習教育研究センターの会計から支出することとした。夏休み科学講座が黒字だったのでその収入を充てることができたのである。



9. 11月22日 鹿児島市立科学館「科学の祭典」で

## 10. 「科学の祭典」への参加

2009年には11月21日、22日に開催された「科学の祭典」に出展し、学生が〈しゅぼしゅぼ〉を実演した。学生たちは入れ代わり立ち替わり、2日間ほとんど途切れることなく、何度となく実演していた。また両日とも、鴨池公民館に併設された特設ステージ上で実験を演示する機会を与えられたので、松野が吉川辰司氏によって製作されたゲーリケの真空ポンプを披露し、当時の実験を再現してみせた。

## 11. 熊本県山鹿市での分子模型講座

例年1、2月は学年末試験と重なるので、毎月継続して行う「分子模型講座」と「大道仮説実験講座」以外の講座は休止していた。しかし2009年度にはこの時期にも市民向けの講座を実施した。事業の正式名称は「2009年度バイオガスの精製・輸送・貯蔵技術を用いた家庭向け精製メタンガス供給モデル事業 バイオメタンガスを利用した地域循環型エネルギーの環境教育・ESDプログラム開発」(以下「バイオメタンガスプロジェクト」と略記)といい、鹿児島大学生涯学習教育研究センター小栗有子准教授がこの事業を主宰した。即ちプロジェクトの企画立案から始まって他団体との折衝、予算管理、会場の手配等はすべて小栗准教授が担い、わたしたちはそのうちのごく一部を担当したにすぎない。学生たちに依頼された内容は(1)2010年1月30日から31日と2月10日から11日、延べ4日間、熊本県山鹿市の施設に前泊し、翌日、山鹿市周辺の親子を対象にバイオメタンガス精製のしくみについて分子模型を作って説明する。(2)この講座およびこの講座と並行して開設される市民向けの啓発事業のために、メタン精製に関連する分子模型や掲示物を作製する。(3)当該



10. 2010年2月11日 熊本県山鹿市で  
「メタンガスプロジェクト」



事業の意義を市民向けに啓発するためのパンフレットの原稿を作成することなどだった。

学年末試験の時期と重なっていたものの、1月の合宿には7人、2月の合宿には11人の学生が参加した。そのうち北村晃太郎君（水産学部）、宮田直彦君（理学部）、平江大地君（農学部）、弟子丸めぐみさん（理学部）、御手洗麻衣さん（理学部）、高森天仁君（工学部）、田川華子さん（理学部）など2009年度から自主ゼミに参加したメンバーが半数近くを占めた。分子模型の作製についても試験終了後に集中的に取り組んだ。中でも理工学研究科に在籍していた千歳祐介君は専門分野の知識を活かして分子模型の設計、製作、原稿の作成にめざましい働きをしてくれた。

鹿児島生涯学習教育研究センターが主宰する自主ゼミ鹿児島大学楽知ん研究会は、ボランティアグループでもあって、原則としてその活動に関し生涯学習教育研究センターが予算措置することはなく、離島での科学講座について交通費の実費負担をしたことが唯一ともいえる例外だった。けれども「バイオメタンガスプロジェクト」では小栗准教授の計らいで学生たちにもアルバイト料を支払うことができた。活動の財政的な措置は組織人事と同様にきわめて重要な課題である。しかしわたしが私費で活動費を負担したことも少なくなく、この課題について中心メンバーとわずかに話題にできただけだった。リーダー養成を目標として掲げていたにもかかわらず、この課題について正面から議論できないままに終わったことは心残りである。

鹿児島大学楽知ん研究会の最後の活動は、2010年3月18日から19日、霧島自然ふれあいセンターでの合宿研究会だった。18人の学生が参加したこの合宿の後、鹿児島大学楽知ん研究会は解散し、わたしも3月31日に鹿児島大学を離任した。

## 12. おわりに

改めて考えてみるに、「鹿児島大学楽知ん研究会」とは、いったいどんな組織だったのだろうか。自主ゼミとは正規の履修課程として認められない自主的な教育研究組織で、単位が出るわけでもないし、ましてアルバイト代も交通費も支給されない。それでもふつうの大学サークルや同好会とちがって、一般市民を対象に活動するのだから、まちがっても失敗が許されない状況に追い込まれることもしばしばだ。わたしはといえば、そういう学生たちが希望するまま、講座の参加者に請われるがまま、なかば道楽のようにして

科学教育の自主ゼミを運営してきたにすぎない。離島で科学講座を開催するようになったのは、進藤君に島の魅力を吹き込まれたからだ。「分子模型をつくる講座を開いてほしい」などと言い出したのは、夏休みの科学講座に参加した小学生だった。「ウチの子の学校にも来てほしい」という教育熱心な母親の声に支えられて、いろんな小学校にも押しかけた。そもそも、子どもだけを相手にするならともかく、おとなも参観している場で「先生役をやりたい」などと学生が言い出すとは思ってもいなかった。わたしはただ、そういうまわりの人たちの要望に沿うよう、その時どきのきっかけに棹さしてきただけなのに、そのたびに予期しない出会いがあり、きっかけは信頼の絆となり、始めは想定もしていなかった新しい展望が次つぎと拓けてきた。

そういえばこんなことがあった。夏休みに開催する講座のために準備をしていたわたしたちは、その日、たまたまオープンキャンパスに来ていた見ず知らずの女子高校生2人に「君たち、どうせヒマだろうから、科学講座のアシスタントをやってみないか」と半ば冗談で声をかけた。この2人は2日後、ほんとうに講座の手伝いにやってきた。あろうことか、市立科学館での科学の祭典でも、そのうちの1人と再会することになった。聞けば8月にわれわれのアシスタントを務めたことをきっかけに母校の科学クラブに入部し、その縁でこの日、科学の祭典でボランティア・スタッフしているのだという。彼女に、わたしが実演した実験でアシスタントを勤めてもらったのは言うまでもない。

始めはみんな通りすがりの人であり、行きずりの見物人だったにすぎない。ただそれをきっかけに、ほんの少し踏み込む勇気がある者だけに、新しい世界は拓けたのだ。大道仮説実験を実演していると、助手や先生役をやりたがる小学生がしばしば登場する。「鹿児島大学楽知ん研究会」



11. 11月21日 科学の祭典で 因縁浅からぬ 高校生と



とはそういう小学生の、いや、大学生の遊び場のようなものだったのかもしれない。そんなことができたのは、板倉聖宣氏が「仮説実験授業」を創り、宮地祐司氏が「大道仮説実験」のプランを開発し、山田正男氏が〈発泡スチロール球による分子模型製作〉を開発したからこそ可能になったことを、もういちど確認しておきたい。誰もが模倣しよう、そして模倣するに値する科学教育プログラムが開発されていればこそ、小学生にだって先生役はつとまったのだ。

2009年10月31日から11月1日まで、岡山理科大学科学ボランティアセンターが主催したシンポジウムに招かれ、各地の大学で活動している科学教育サークルの責任者と交流する機会があった。この場で「昨今、理科系の大学では、学生の科学教育ボランティアが流行のようになって

いる」と聞かされて大いに驚いた。鹿児島大学楽知ん研究会の活動も、ブログを通じて各地の大学関係者の間で注目されているというではないか。世事に疎いわたしは、自分ひとりの道楽のつもりで楽知ん研究会とつきあっていたのに、知らないうちに時流に乗っていたのだ。しかし考えてみればそれも不思議ではないかもしれない。人びとが思い描く夢のままに動いていれば、やがてはそれが世の常道となるもの道理ではないか。だが、いくら思いを募らせても、かげで後押ししてくれる人たちの働きなくして夢は実現しない。多くの企画を実現するために尽力してくださった方がたのお名前をここに挙げさせていただいたのはそのためである。